

保育者養成におけるキャリア教育

著者	伊藤 美加
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	56
ページ	1-8
発行年	2018-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000909/

保育者養成におけるキャリア教育

伊藤美加

I はじめに

京都光華女子大学こども教育学部こども教育学科(以下、本学科)は、2015年度に同大学短大部こども保育学科を発展的に改組し設置され、今年度2018年度に完成年度を迎える。本学科には、保育士資格・幼稚園教諭免許取得を主とする幼児教育コースと小学校教諭免許取得を主とする学校教育コースとがあるが、両コースとも共通して、教育・保育現場において、おもいやりと慈しみの心をもって、一人ひとりの子どもを尊重し、個性を深く理解しながら、その良さを引き出せる教員・保育者の養成を目指している。

本学科では、この「慈しみの心をもって子どもと向き合う教育者・保育者へなる」というディプロマポリシー実現のために、完成年度以降のよりよい学科運営や教育活動の改善を図るべく、カリキュラムの見直しをはじめ様々な課題について検討しつつある。その検討事項の一つに、キャリア教育がある。

本稿では、実習体験(および実習の事前事後指導)をキャリア教育の初期段階と位置付け、保育者養成におけるキャリア教育の課題について論じることを目的とする。

II キャリア教育とは

中央教育審議会の『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』(答申)(2011)によると、キャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」を指す。ここでキャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を指す」ことから、キャリア教育は、自分のキャリアを一生をかけて形成していく、すなわち、自分らしい自分なりの生き方を見出すための教育的働きかけといえる。

1. キャリア教育で育成すべき力:「基礎的・汎用的能力」

同答申では、子どもが学校を出た後に社会的・職業的に自立できるように、学校から社会・職業への移行が円滑に行われるために必要な力を明確化し(図1)、幼児期から高等教育に至るまでの体系的なキャリア教育の推進の重要性について述べている。

この中で「基礎的・汎用的能力」は、これまでの議論を踏まえ、キャリア発達を促すために育成することが期待される具体的な能力(国立教育政策研究所の4領域8能力)や、類似する各能力(内閣府の人間力、経済産業省の社会人基礎力等)を再構成し、「仕事に就くこと」に焦点を当てつつ「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として、提示された。すなわち、キャリア教育がその中心として育成すべき能力が「基礎的・汎用的能力」であり、様々な教育活動を通して育成されるのである。

更に「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応



図1: 社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力(中央教育審議会、2011)

能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される。

2. 小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育

また同答申では、キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」は、各学校段階において工夫された教育を通じて達成する必要があるとする。

まず小学生は、進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期であり、自己及び他者への積極的関心の形成や発展、身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上等が挙げられる。次に中学生は、現実的探索と暫定的選択の時期であり、興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成や生き方・進路に関する現実的探索が始まる。そして高校生は、現実的探索・試行と社会的移行準備の時期であり、自己理解の深化と自己受容を基に進路の現実吟味が進み試行的に参加するようになる(文部科学省(2006)『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き』)。

3. 大学におけるキャリア教育

2000年代からの若年者雇用の課題を契機として、あるいは大学教育のあり方との関連から、大学におけるキャリア教育の必要性については注目を得てきた(佐藤、2018)。

大学等の高等教育では、自らの視野を広げ、進路を具体化し、各学校段階で発達段階に応じて育成した社会的自立・職業的自立に向けて必要な意欲・態度や能力を、専門分野の学修を通じて伸長・深化させていく時期である。それまでの体系的な取り組みに連続するよう、一人一人のキャリア発達を促すために、教育課程に組み入れていく多様な取組が求められていると言えよう。

特に保育者養成校においては、学生のほとんどが保育に携わりたいという希望を持って、幼稚園教諭・保育士資格取得を目指し入学する。そのため、「保育者になる」という明確な目的意識を持たせた上で、一人一人のキャリア発達を促す支援を進めていく必要がある。

4. 本学科におけるキャリア教育

本学科では、同答申に基づき考えてみると、学科の特色やこれまでの取り組みを活かしながら、「基礎的・

汎用的能力」それぞれについて具体的な目標を設定して、キャリア教育を推進することが必要と考えられる。

本学科の特色の一つに、「幼児教育の重視」がある。すべての学生が学校教育の出発点である幼児教育についての基礎的理論の学習と現場の体験を行う。これを通じて、子どもたち一人ひとりに目配りと心配りをしながらその成長を助けられる教員・保育者へと育てることを基本に据えている(本学科設置の趣旨等を記載した書類より)。具体的には、1年次に、保育・教育の全体像を鳥瞰させるための科目『こども教育概論』を、2年次に、保育・教育現場を知って子どもたちと接する機会を持たせるための科目『こども教育基礎演習A』および初めての実習である『幼稚園教育実習I(観察実習)』を開設し、子どもたちと接する喜びに導かれつつ、教育現場についての理解を深めながら理論的学習に励めるようにしている。

ここで『こども教育基礎演習A』は、『幼稚園教育実習I(観察実習)』の事前事後指導にも該当するため、教員・保育者になるという目標を持ち、それらを具体的に行動に移していくことで実現を図るための科目とみなせることから、本学科におけるキャリア教育の初期段階と位置付けることができよう。

Ⅲ 『こども教育基礎演習A』の概要

『こども教育基礎演習A』(2年次前期、必修科目)は、幼児教育コースの専任教員5名が学生の支援にあたる。この科目では、幼児教育について併設の幼稚園での保育現場や施設を見学する機会により理解を深めること、また、『幼稚園教育実習I(観察実習)』の意義や目的、内容について学び、実習に向けての心構えや観察の仕方、観察記録の取り方といった技能の習得、実習のための事務手続き等を行うこと、実習終了後には実習を振り返って自己の課題を明確にするとともに保育計画の作成について理解することが求められる。

図2に2018年度『こども教育基礎演習A』のシラバスを示す。また、表2に、「基礎的・汎用的能力」別における授業内容の項目例を示す。

科目名	こども教育基礎演習A
開講年度	2018年度 前期
教員名	配当年次 2年 智原 江美、伊藤 美加、永本 多紀子、山崎 玲奈
代表教員名	智原 江美
授業テーマ	幼稚園教育について理解を深め、幼稚園教育実習（観察実習）に向けての基礎的な心構えとともに、実習終了後には、理論と実践とを重ね合わせて振り返りを行う。
授業の概要	幼稚園教育について、保育現場の見学も含め理解を深める。また、幼稚園教育実習（観察実習）についての意義や目的、内容について学び、実習への心構えや必要書類を作成する。実習終了後には実習を振り返り自己の課題を明確にする。
到達目標	1. 幼稚園の概要を知り、子どもの園生活について理解する。 2. 幼稚園教育実習（観察実習）の意義・目的を理解し、観察記録のとり方の基本を習得する。 3. 幼稚園教育実習（観察実習）を振り返り、自己の課題を明確にするとともに、保育計画の作成について理解する。
授業計画	1. 実習の概要と授業の全体計画について 2. 幼稚園教育実習の意義と目的 3. 保育環境の理解と幼稚園の施設見学 4. 幼稚園の施設見学の振り返り 5. 幼稚園での子どもの生活と観察記録の取り方 6. 子どもの活動の観察の視点と幼稚園での保育参観 7. 幼稚園での保育参観の振り返り 8. 実習目標と実習書類の作成 9. 実習の心構え（特別講義） 10. 実習に向けての教材準備 11. 実習の振り返りと自己の課題の把握 12. 実習報告会への参加 13. 保育指導計画作成について 14. 保育指導計画の作成 15. 特別支援教育について
授業方法	講義および幼稚園への見学も含めた演習、報告会などでの討議を行う。
授業時間外学修(予習・復習等)について	授業時間以外にも幼稚園や保育について積極的に知り、実習に向けての実習書類を滞りなく作成・提出できるよう取り組んでください。また、日ごろから絵本や玩具などの子どもの文化に興味・関心をもって、子どもの理解を深めましょう。
評価方法	受講状況（20%）、実習書類の作成（10%）、報告会への参加状況（20%）、提出課題の提出状況・内容（50%）

図 2：2018 年度『こども教育基礎演習 A』のシラバス

そこで、実習後に学生はどのような学びを行ったのか、以下の通り調査結果を報告することで、教員・保育者をめざす学生に対するキャリア教育の課題を考えるデータとしたい。

Ⅳ 調査方法と結果

『幼稚園教育実習 I（観察実習）』（2018 年度は 6 月 11 日から 15 日までの 5 日間）終了後に調査冊子を配布し、実習を振り返ってそれぞれの質問に回答してもらった。表 2 に示す通り、はい・いいえの諾否法による 10 の質問項目に加え、実習に関する具体的な内容について自由に回答してもらった（自由記述項目）。調査実施に協力し回答したのは 81 名であった。

なお調査冊子には、コミュニケーション・スキル等

を尋ねる質問項目も含まれていたが、本稿では報告しない。

1. 質問項目

表 2 の通り、保育に対する理解や保育に必要な意欲・態度・能力について、「はい」と回答している割合が大きく、肯定的に回答しているとみなせる。項目 1 で「いいえ」の回答が多かったのは、実習中に複数のクラスに入る場合があったため、すべての子どもに関われなかったからと考えられる。また項目 4 の実習記録については、後の自由記述項目にあるように、記録の書き方にまだ不安がある学生がいるためと考えられる。

表 1：キャリア教育で育成すべき能力（中教審、2011）と『こども教育基礎演習 A』における例

基礎的・汎用的能力	分野や職種にかかわらず、社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力	具体的な要素例	本科目における例
人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力	他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等	・同じ実習園でチームをつくり、実習に必要な作業を協同して取り組む ・実習報告会の実施
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力	自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等	・実習目標の作成→ペアチェック→教員による個別添削指導 ・実習の振り返り→教員による個別面談 ・課題の管理 ・提出物
課題対応能力	仕事を進める上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力	情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追及、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等	・教材準備 ・観察記録の書き方 ・保育計画書の作成 ・お礼状の書き方
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等	・園長先生の講演 ・先輩学生の講演 ・園見学 ・保育参観

2. 自由記述項目

各質問項目に「はい」と回答した場合に、具体的な内容について自由記述を求めた。

子どもとの関わり

「項目 5：積極的に子どもと関わる事ができたか」に続けて、「どのような関わりをしましたか？」と尋ねた。一緒に遊ぶ、制作が最も多く、絵本の読み聞かせや手遊び、歌といった部分保育や、着替えやトイレ、食事の補助・援助がそれに続いた。「自由遊びの時に一人 1 グループにいるのではなく、いろいろな子どものところへ行ったり」「挨拶をしたり、『どんな食べ物が好き?』などといった会話をたくさんするようにした」と積極的な声かけ・言葉かけを心がけたとの報告があった。

指導や援助の方法

「項目 6：適切な指導や援助の方法が分かった」に続けて、「どのようなことが分かりましたか？」と尋

ねた。「一人一人の発達を理解し、その子に合わせた指導」を挙げる割合が最も多く、「頭ごなしに注意するのではなく、子どもたち自身に自分の行動や発言がどうだった分からせる必要がある」「子どもは先生の行動を良く見ているため、指導をする際、私たちも子どもたちと同じように守りごとを守り、同じ行動をする」「なんでも手伝うのではなく、『やってみよう』と声かけをする」「子ども同士のけんかが起こった際、すぐに怒るのではなく、子どもの気持ちを考え共感する」のように、具体的な指導や援助の方法を、自分の身をもって学んだことが伺えた。

コミュニケーション

「項目 7：先生とコミュニケーションを取ることができた」に続けて、「どのようにコミュニケーションを取れましたか？」と尋ねた。毎日の挨拶の他、反省会や掃除の時間に質問する等会話の機会を持てたことや、絵本・手遊びについてのアドバイスももらったことで、コミュニケーションをとることができたと回答

表2：各質問項目に対する回答

	質問項目	はい	いいえ	無回答
1	子どもたちの名前は全員覚える事ができた。	50	30	1
2	1日の先生の動きが分かった。	79	2	0
3	1日の幼稚園の仕事を覚える事ができた。	75	5	1
4	実習記録は要点を押さえて記述することができた。	66	12	3
5	積極的に子どもと関わることができた。	80	1	0
6	適切な指導や援助の方法が分かった。	73	6	2
7	先生とコミュニケーションを取ることができた。	73	6	2
8	幼稚園教諭という仕事の楽しさが分かった。	79	2	0
9	幼稚園教諭という仕事の厳しさ・大変さが分かった。	80	1	0
10	今回の実習で成長したと感じた。	76	1	4

していた。「分からないことや疑問に思ったことはすぐに聞く」「やることがなかったら、手伝うことができるか、聞きに行く」と、主体的に働きかける大切さを学んだとの回答もあった。

保育職の理解

「項目8：幼稚園教諭という仕事の楽しさが分かった」に続けて、「どのような楽しさが分かりましたか？」と尋ねた。子どもの笑顔が見れる、子どもとたくさん遊べる、子どもの成長を感じられると、子どもとの関わりに関する回答が最も多かった。例えば「子どもから先生！と呼ばれたり、最初は人見知りしていた子が寄ってきてくれたりして、楽しさ・嬉しさを感じた」「今までできなかったことが援助がきっかけでできるようになった姿を見るとやりがいを感じる」「自分の努力が子どもに喜ばれるので、達成感があると思った」との回答があった。

また、「項目9：幼稚園教諭という仕事の厳しさ・大変さが分かった」に続けて、「どのような厳しさ・大変さが分かりましたか？」と尋ねた。「子ども一人一人に対応する難しさ・大変さ」が最も多かった。例えば「一人ひとりの発達の仕方が違うため適切な援助をそれぞれの子どもの行うことが難しいと感じた」「集団の中で一人一人に寄り添うこと」「子どもたちがやる気を起こすような声かけや注意する時の言葉遣い」が挙がっていた。そして、多くの子どもを見ること、クラスをまとめることがそれに続き、その他、労働時間の長さや記録の多さ、休憩時間がなく常に動いていること、保護者対応についての回答もあった。

実習成果

「項目10：今回の実習で成長したと感じた」に続け

て、「どのような点で成長を感じましたか？」と尋ねた。

まず、「初日に子どもたちに教えたりするとき、分かりやすい言葉を使おうと意識しすぎていたが、最終日には自然と言葉がでていた」「子どもに合った援助方法を自分で考え、行動に移すことができた」「少しだけ視野が広がった。少し多くの子どもの困っていることに気付くようになった」のように、子どもと実際に関わることで具体的な保育指導・援助の方法が実践できるようになったとの回答があった。次に、「子どもについてもっと興味が沸いたし、好きになった」と子ども理解の深化を示す回答があった。そして、「子どもの一日の流れを知り、子どもが一日を過ごすために、保育者の配慮が大切であることを学ぶことができた」「園でやる一つ一つの活動に込められた狙いや意味を考えるようになった」と、保育への理解の深化を示す回答があった。

更に「実習を通して、あなたの身についたと思うことは何ですか？」と尋ねたところ、以下のような具体的な回答があった。

- ・子どもとのコミュニケーションの取り方や記録の書き方が分かった。
- ・その場に応じた環境づくりや、一人ひとりの性格に応じて対応することが少しできるようになった。
- ・子どもを見て、声のかけ方、説明の仕方をかえること。注意するのではなく、子どもが自ら考え行動するように声をかける方法を学んだ。
- ・すぐに援助しようとせず、子どもの様子を見守るということ。といった具体的な保育技術だけでなく、周りや全体を見る大切さや、積極性、責任感、あるいは、子どもを好きだと思える気持ちや自信。

今後の課題

「項目 11：これからの自分の課題を書いてください」と尋ねたところ、以下の通りであった。自分の課題を、次の実習で改善すべき具体的な行動として考えられるようになったことが示唆される。

- ・保育者の工夫している部分を見て、なぜその行動をとったのか分析する。
- ・子どもと関わる際の言葉の選び方。
- ・できること、できないことの見極め。なんでも手伝わないこと。
- ・子どもの目線で考え、それを分かった上で保育者としてどのような対応をするか考える。
- ・これからは子どもの発達をより深く学び、保育者がどのような細かな配慮を行っているのかを知る。
- ・子どもに合わせた言葉選び、接し方。4歳児には通じて3歳児には通じる言葉。4歳児には通用する声かけでも5歳児には笑われてしまうものなど……。
- ・子どもと遊んだり話したりしている間も周りをよく見れるようにしたい。
- ・視点を多く持つこと。観察する上で視点が少ないと困ると思った。
- ・子どもたちをまとめる力をつける。自分の話を聞いてもらえるようにする力をつける。
- ・周りをあまり見れていなかったと思ったので、しっかりと周りを見ることと、一人一人に合った援助をすること。
- ・自分がやらなければいけないことは何なのかを考えて行動すること。
- ・子ども一人一人を理解するための言葉の引き出しを多くもつこと。
- ・手遊びをもっとレパートリーを増やしたい。
- ・ピアノが少し苦手なので、次の実習ではスラスラ弾けるようになる。

実習の感想

「項目 12：実習全体を通しての感想を書いてください」と尋ねたところ、以下のよう、実習へ行く前は不安がたくさんあったが、実習で様々なことを学ぶことができて良かった、充実した日々を過ごせた、学んだことを次の実習にいかしたいとの感想が最も多かった。

- ・不安なことのほうが多かったが、子どもたちは素直な気持ちで関わってくれるし、遊びの時は「一緒に遊ぼう！」など話しかけてきて、自然と子どもの輪の中に入ることができたので、良かったです。楽しかったです。学ぶこともたくさんあり、今後の実習や保育者という夢に向かって頑張ります。
- ・今まで子どもと関わる機会が少なく、座学の方が多かったため、本当に私は保育者になりたいだろうかと不安だったのですが、解消できました。
- ・もっと厳しいものだと思っていただけ楽しかったと思った。部分実習などがなかったから、そう思えたのかも知れない。やるが多すぎて、これを一人でやっていると考えますとすごいと思いました。「なにかすることありますか」と聞くと無限にやることが出てきて怖かった。
- ・怖い、大変なイメージがとてもあったけれど、やってみると思ったより出来たし、今までやってきたことが役に立った。やっぱり子どもが好き。一緒にいて楽しいと思いました。
- ・初めての实習でとても緊張しました。毎日ピアノや記録簿、指導案をかくことがとても大変でした。しんどくてやめたい時もありましたが、あきらめずに最後までやり遂げたので、楽しいと感じることが出来ました。次の実習では大変さ・楽しさを活かしていけるようにしたいです。

また、以下にあるように、実習前に知っていたことでも実感を持って理解が深まったこと、知っていることとできるようになることとは違うこと、それが今後の学びに繋がるということが挙げられていた。

- ・私が思っていた以上に、子どもは私や保育者のことをしっかり見ているなと感じた。保育者も子どもたちをしっかりと見ていて注意をしたり、その子供に合った援助をしていた。また保育者は保護者ともコミュニケーションを取ったり、他クラスの保育者とも情報交換したり、イベントで子どもが楽しめるような環境構成を考えていたり、子どもを第一にしていると感じた。
- ・子どもと接することはとても楽しかった。同時にどのように接すればよいか迷うこともあった。自分の未熟な点があったので、これからの学習に励みたい。

- ・保育者の大変さをすごく感じる事ができました。子どもたちにいろいろな力を身につけてもらうためには見守ったり、時にはサポートすることが大切だとわかりました。
- ・今回、絵本の部分保育をして、読むスピードや本をめくるスピードが速くなり、自分が伝えたいねらいを子どもたちに上手く伝えられなかったと感じる部分があったので、次の実習で直せるようにしたいと思った。
- ・幼稚園に入らせていただき、クラスで過ごすことで一日の流れが大まかに分かり良かったです。また一日の保育、一週間の保育には流れがあることを実感しました。保育者と子どもの間には信頼関係があるので、叱ったりしたときも注意を理解してくれるのだと思いました。多くの学びがあり、とても充実した実習となりました。
- ・初めての实習でしたが、子どもと保育者の関係や保育の一日の流れを知ることが出来ました。援助もできるところは自分ですという子どもの意志から、できないところを援助しました。今後は、子どもの発達や保育者の配慮をより深く学びたいと思いました。
- ・教諭の大変さを身をもって知ることが出来たと同時に、自分はこの仕事に向いているだろうかと考え直すこともあった。子どもをまとめるのは簡単なことではないと知った。
- ・初めての实習で分からないことがたくさんあったけれど、子どもと関わる楽しさが今回一番気づけて感じたことでした。職業に就くとき楽しいと思う気持ちがあることは大きいと思います。今回得たこの気持ちをこれからも大事にしたい。

V さいごに：まとめ

実習後の調査結果から、実習体験を通して実際の保育現場を目の当たりにし、現場の厳しさや大変さを痛感しつつも、同時に楽しさや自らの成長を見出し、保育者になるための学びを深める学生の様子が伺えた。同時に、保育者になるという職業選択の揺れ、保育者の適性に対する疑念も僅かではあるものを見出された。

実際のところ、「子どもが好き」「子どもの頃にお世

話になった保育者のようになりたい」という理由で保育者を目指し、保育者養成校へ入学したものの、それ以上の自分なりの理由を見出し、保育者になるというキャリア形成を一度の実習で実現できるわけではない。入学後、保育者になるための学びの中で、徐々に形成されていくと考えられる。その意味で、4年間の大学における学習を実習と関連付けながら、系統的にカリキュラムに位置づける必要がある。

例えば、入学直後は、保育者として働く意味・意義を認識する、あるいは保育者という職業選択の見直しを含む「キャリア形成」の段階。2年次・3年次は、保育者になるための教育実習・保育実習での実体験に基づく「キャリア発達」の段階。4年次は、就職活動に向けた「キャリア開発」の段階。それぞれの段階において、学生が自分らしい自分なりの生き方を見出すための指導・支援を、各専門科目の連携等、多様な取組を推進していくことが望まれる。

更に一度獲得されたキャリアも、その後の人生のそれぞれの節目において、再構築されたり、修正されたりしていくのだろう。その意味で、実習後はもちろん、卒業後にも、何か葛藤や悩みが生じた場合の対応を考えたり、問題解決の方法を考え実行したり、自分のキャリアを考え設計したりできる能力を養うためのキャリア教育を展開していくことが、今後の課題と言えよう(高野・日野・利根川・和田, 2018)。

VI 引用・参考文献

- 中央教育審議会 (2011). 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』(2011年1月31日中央教育審議会答申) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2018年8月20日閲覧)
- 文部科学省 (2006). 『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き』 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/070815/all.pdf (2018年8月20日閲覧)
- 文部科学省 (2011). 『高等学校 キャリア教育の手引き』 教育出版
- 佐藤史人 (2018). 「大学におけるキャリア開発と支援」 佐藤史人・伊藤一雄・佐々木英一・堀内達夫 (編

著)『新時代のキャリア教育と職業指導』法律文化
社

高野亜紀子・日野さくら・利根川智子・和田明人(2018).
保育者養成課程におけるキャリア教育の課題：卒業
生の動向調査から 東北福祉大学研究紀要 42
pp31-45